

中村素堂

ただ、色の配合は文学の内容とも関係あることで、何でもいいというわけにはいかない。金箔や金泥を一面に使ってきらきら輝いているものの中に、いかにも何やらこわれそうな歌など書いても、途中で筆がとまっちゃう。それが生地は薄鼠色とか薄藍色に金粉ということになるとかにもしつとりします。しかし、何と書いても白が墨に最も調和します。それに白はどんな色にでも調和します。洋服でも、紫の服、緑色の服といろいろあっても、白いワイシャツは全部合います。着物でも喪服の黒はもちろんのこと、茶色の訪問着でも白い襟をもつてくれば合います。そういう配合のみでなく、悲しい時でも、めでたい歌にも白は何にでも合います。それにまた墨なども、青墨・古墨・和墨・唐墨と、いろいろ表現する文学の内容を考えて使つてご覧になるといい。

材料の問題にはもうひとつサイズの問題があります。どういうサイズのものに入れるべきか、横に長いものに入れてゆくのがいいとか、縦に少し細くて、しかもその細さは普通の決め方ではなく、十センチほど細くしたためにすごく瀟洒になることがある。そうではなく、ちよつと広いために、いかにもおらかな感じを与えるものがある。だから最初に考えなければならぬのに、キャンパスの質もありまずけれど、同時にサイズがあります。むかしの人が扇面に書いてみたり、丸型に書いてみたりしてずいぶん苦労しておりますが、本当の芸術家はみなそうしたものでしょう。

俵屋宗達の画いたものはほとんど国宝級のものばかりですが、そのなかに源氏物語関屋の図といって、光源氏が石山寺参詣のために逢坂の関にさしかかるところを画いたものがあります。四角い紙の中に関所を越えるところを描こうとするがうまくゆかない。そこで一色で斜めにサツと山の傾斜面を画いた。山を画いてしまえばあとの残りは三角です。そこに人が通るところを画いたから山の一部分のぞき見しているような世界(空間)が出来て、その美事なことといったらない。なるほどと思いました。書でもあります。短歌などで、どうにもはまらない歌がある。そういうものは、どつちかに

引き寄せてしまえばいい。こんなにあける必要があるかというくらい端に入れて印を隅に押すとか、先程の三角形に引き落す方法などして配慮する。こういう時に押す印の位置とか色なども、作品のなかで大きな役割を持つ素材のひとつです。

中国人の偉いことのひとつは朱肉で印を押すことを見出したことだと思ふ。むかし芸術院会員に油絵の寺内万次郎という方がおられました。私と同じく浦和に住んでおられました。私も二人でまず埼玉県展を企画したのですが、ある時油絵に向く印をひとつ作つてくれないかといわれたのです。油絵に印を押すのですかと聞きます。「印のよさといつたら匹敵するものはないよ。いくら油絵画家が力んでみたところで、あの印をひとつ押すということでは書家に敗けるよ」といわれた。私もそう思います。東洋の芸術構成の小道具の中で最もすばらしいものは印だと思ふ。神社仏閣のお札でも、あのでっかい印が押してなければ誰ももらいませんよ。大きい印が押してあるから、有り難そうでついはずんでしまう。全く印というものは魔術ですね。不思議な魅力があります。ですから印の位置とか大きさ、色などは作品に大きな影響を与えます。印の位置がうまいのは、最近では呉昌碩が一番です。呉昌碩の作品を見ると、印の間隔が一尺くらいあいているものもある。それがちつともおかしくない。呉昌碩は絵も書もかきますが、本来は印人ですから使ひ方が実にうまい。印の押し方はずいぶん呉昌碩に学びました。

材料の問題で、紙質・サイズ・紙の形・印ときまして、これは材料といつてよいかどうかわかりませんが、書家から見れば材料である線、いわゆる線質をどうするかということがあります。非常にしなやかな線でゆくか、ふくらみのある線でゆくか、細い激しい線にするか、速い線でゆくか、遅い線でゆくか、この作品ならば遅い方がいいのではないか、速い方がいいのではないかといいことです。一流の書家といわれる人は、自分の持ち味になる線質を持っておりませんが、そこへゆくまでには大抵そういうことを考えてきておりまして、作品構成上の線質をどう決めるかに心をくだいています。

(つづく)